



特定ケア看護師活動から得たこと

東京医療保健大学大学院 看護学研究科 高度実践看護コース M1 加藤祐子

私は、JADECOM-NDC研修センターでの研修を2018年度に修了し、翌2019年度は国立国際医療研究センター病院で1年間の臨床研修を行いました。そして、2020年4月から診療看護師を目指し、大学院に進学しています。そんな私がNDCへ応募したきっかけを少しお話しさせてください。誰しもが看護師歴を重ねていくと、今後どうなりたいのだろうかという自身のキャリアプランについて悩むことがあるかと思います。私自身も、経験を重ねた分、できることも増え、困ることも少なくなり、身につけた知識、技術、経験で一通りの業務は行えるようになりました。しかし、自分は成長しているのだろうか、今後どのようなキャリアを築きたいのだろうかという悩みも増えていきました。そして、看護師歴を重ねても私には苦手なことがありました。それは重症患者さんのご家族から「今日はどうですか?」「これからどうなりそうですか?」と質問されることです。ご家族にとっては、常にそばにいる私たち看護師は話しかけやすい存在だと思いますし、そうでありたいと思っています。しかし、医師と方針や現状の評価の共有が不十分であったり、医学的な知識が乏しく、自信を持って説明することができずにもどかしい思いを何度もしてきました。また、患者さんの異変に気付いても、その異変を適切にアセスメント、言語化し医師に伝えることができず、「気づいていたのに……」と後悔することもありました。圧倒的に医学的知識が足りないと強く感じるようになったものの自己学習だけでは解決できず、悶々とする日々が過ぎていました。その頃には仕事

が楽しくなく、看護師という仕事に誇りを持つこともできずにいました。この先も長く働くためには、もっと知識や技術を習得して、楽しく、誇りを持って働きたいと考えようになったときに、上司からJADECOM-NDCを薦めていただいたのです。この出会いが私の看護師人生の大きな大きな転機になりました。その時の私には「患者さんのために」とか、「病院のために」「地域のために」という気持ちはあまりなかったのですが、自分が習得した知識や技術は患者さんやスタッフに貢献してこそ価値があるものですから、患者さんやスタッフ、病院の役に立ちたいという思いは根本にあったと思います。

病院としては21区分38行為の特定行為研修を修了した看護師を迎え入れるのは初めての試みであり、患者さんのみならず、看護師、医師、コメディカルスタッフ、誰もが「特定ケア看護師って何をする人なの?」といった状態でした。本音を言うと、私自身も「特定ケア看護師って何だろう?」と思っていましたし、一体何をしたらいいのだろう、何ができるのだろうと不安がいっぱいの中、臨床研修がスタートしました。

臨床研修の1年間は診療科の医師に指導を受け、初期研修医とほぼ同等の役割をさせていただきました。病棟看護師として勤務していると、毎日受け持つ患者さんが変わり、患者さんが転棟した場合にはその後の患者さんの様子を知ることが難しいものです。しかし、特定ケア看護師として働いていた期間は、患者さんが来院された時から退院まで、その後の外来まで担当することができました。それまでの看護師として

の判断や医療行為実践から特定ケア看護師としての判断や医療行為実践へと変わり、自身が担う責任や求められる能力、役割の大きさに対し、役割が拡大した分、責任も大きくなり、自分が選択した治療に対する反応はどうだろうか、自分が行った医療行為は安全だったのだろうかと不安で仕方がなくなること多々ありました。そして、この不安をぬぐうためには、継続して学び、知識、技術をしっかり身につけること、それしかないのだということも実感しました。知識や技術を習得し、根拠をもって患者さんに関わることで不安は小さくすることができます。そうはいっても、その努力はとても大変なことです。しかし、受け持ちの患者さんが回復した時、ありがとうと言ってもらった時、ご家族の喜ぶ顔を見た時、その回復を医療チームで共有した時の達成感は何とも言えないものがあります。コツコツとまじめに誠実に取り組んできた努力は、必ず自分を救い、他者の幸福に貢献することができますと信じ、挫けそうになりながらも、自分を鼓舞しながら取り組んできました。

とにかく必死に走り抜けた臨床研修の1年間でしたが、特定ケア看護師ならではの役割とは、特定ケア看護師だからできることは何だろうかという問いに対する明確な答えは見つかりませんでした。特定ケア看護師を目指した当時は、タイムリーな介入をして患者さんにも看護師にも医師にもメリットをもたらす、チーム医療のキーパーソンになる、看護教育に尽力する、など多くの目標を掲げていました。今も同じ気持ちですが、臨床研修の1年間は恥ずかしながら自分のことで精いっぱいこれらことに全力を注ぐことができませんでした。しかし、必ず特定ケア看護師はこれらの役割を発揮することができますと信じています。そして、特定ケア看護師の役割を型にはめるのではなく、柔軟な発想で活動し、可能性を拡大していきたいと考えています。

微力ではありましたが、病棟看護師やコメディカルと医師との橋渡し役を担い、看護師や

コメディカルの細やかな気付きや情報、疑問を医師と共有することで患者さんの治療を考え直すことができたり、医師の手が空かない時には医師のかわりにドレーンを抜去したり、人工呼吸器の設定を変更したりすることができました。このように活動していくことで、特定ケア看護師という存在が定着していくことを実感し、日々の一つ一つの経験が自信となり、やりがいが増えていくことで看護という職業に誇りを持つことができました。また、客観的に看護師の役割をみることができ、看護の力の大きさを改めて知ることができたことも誇りを持てた要因の一つです。さらに、医師とともに行動することで、今まで知ることができなかった医師の思考過程や患者さんへの思いも知ることができました。医師は患者さんの病気しかみていない！なんて思っていた過去の自分がとても恥ずかしくなるくらい、医師は患者さんを全人的に捉え、治療を考えていました。役割が違うのですから、患者さんを捉える視点が看護師と異なっているのは当然で、看護師の看る、医師の診る、たくさんの「みる」が合わさることで患者さんによりよい医療を提供することにつながり、これこそが専門性を発揮したチーム医療の力なのだと思います。

臨床研修では多くの方々の支援に恵まれ、これまでの経験や知識の枠を超えた学びや発見にあふれた非常に充実した研修期間を過ごすことができました。この場をお借りして深く御礼申し上げます。徐々に特定ケア看護師に興味を持ってくださる看護師スタッフから声をかけてもらう機会も増え、そのたび「とにかく楽しいですよ！」とお伝えしてきました。特定ケア看護師に興味を持っていただけるようになったのは、活動の成果の一つだと思っています。特定ケア看護師の役割を最大限に発揮するためには仲間が必要です。「楽しく、誇りを持って長く働く」ためのキャリアプランの一つとして、特定ケア看護師に興味を持っていただけると幸いです。